近畿大学英語研究会紀要　第３号　2009年１月

日本語の「ＡがＢはＣする文」と遊離数量詞

石　井　隆　之

要旨　日本語助詞の「が」を用いた「ＡがＢ、Ｃする文」（Ｂが遊離数量詞）の文法性、例えば、「男が３人、入ってきた」という文は文法的であることが、石井（2007, 2008a, 2008b）で説明可能であるが、同じ枠組みで、更に「は」を追加した「ＡがＢはＣする文」、例えば、「男が３人は入ってきた」という文が説明できない。そこで、本稿では、石井（2008b）で提案した２つの移動、すなわち、付加部移動と PP 内移動のほかに、付加移動と補部移動の新たな２つの移動を提案し、この提案に伴う、遊離数量詞の基底生成位置の若干の修正によって、この問題の解決を試みた。その結果、「ＡがＢはＣする文」はもちろん、「男が突然３人入ってきた」の文法性、「男が店で３軒飲んだ」の非文法性も分析可能となった。なお、「３人が入ってきた」に見られる遊離数量詞の主語化のしくみや「と句」が入った「男が３人と女が５人」の構造なども同時に確認できた。

キーワード：生成文法、遊離数量詞、照合理論、付加移動、補部移動

The "A-ga B-wa C-suru" Construction in Japanese and Floating Quantifiers

Takayuki Ishii

Abstract　Though the Japanese sentence "A-ga B, C-suru," in which B is a floating quantifier (FQ) as in "Otoko-ga 3-nin, haittekita," can grammatically be explained under Ishii (2007, 2008a, 2008b), it is impossible to give a principled explanation to the sentence "A-ga B-wa C-suru" as in "Otoko-ga 3-nin-wa haittekita" under the same framework. In this paper, in addition to two movements postulated in Ishii (2008b) like adjuct movement and PP-internal movement, we will propose another two suggestions: adjunction movement and complement movement with a slight modification of base-generated positions of FQ in order to solve this problem. As a result of our research, we have also succeeded in checking the grammaticality of "Otoko-ga totsuzen 3-nin haittekita" or "Otoko-ga mise-de 3-gen nonda." Simultaneously, it has become possible to confirm the mechanism of nominalization of FQ as in "3-nin-ga haittekita" or the syntactic structure of "otoko-ga 3-nin to onna-ga 5-nin."

Keywords: generative grammar, floating quantifier, checking theory, adjunction movement, complement movement

1.　はじめに

次の日本語文を観察する。

(1) a．３人が入ってきた。

b．３人入ってきた。

c．男が３人入ってきた。

d．男が３人は入ってきた。

一般に、はっきりと遊離状態となっているのは、(1c)文における「３人」である。というは、「が句」から独立しているからである。(1a)の「３人」と(1d)の「３人」は、それぞれ「が句」と「は句」に縛られているので、遊離数量詞の状態ではない(1)。

(1b)文はどうであろうか。これは、非遊離状態の構造である「３人＋が」の句において「が」が省略された形なのか、そもそも「名詞＋が」が省略され、遊離数量詞が残った形なのかは議論が分かれるところである。(2a)の派生が前者で、(2b)の派生が後者である。

(2) a．「３人が」→「３人」

b．「男が３人」→「３人」

数量詞の統語的振る舞いを扱った石井（2008b）の枠組では、(1c)の構造と文法性に関する原理的説明は可能であるが、(1a)(1b)そして(1d)の構造と文法性の説明はできない。

本稿では、石井（2008b）で提案した「付加部移動」と「PP 内移動」に加え、新たに「付加移動」と「補部移動」を仮定し、(1)文全てを同じ原理で説明する試みを行う(2)。

新提案よる改訂照合理論の枠組みでは、(3)(4)の文や(5)の句の原理的説明も可能となる。

(3)男が突然３人入ってきた。

(4) a．*男が店でワインを３人買った。

b．*男がワインを店で３人買った。

c．男が店でワインを３本買った。

---

(1)　(1)における「３人」は数量詞であるが、「が句」や「を句」から独立した形になっている場合、本稿では「遊離数量詞」と呼ぶ。「を句」の場合も付記しておく。

(i)　３本のワインを持ってきた。

(ii)　ワインを３本持ってきた。

(ii)は「を句」から独立しているので、(ii)における「３本」は遊離数量詞ということになる。なお、本稿では、石井（2008b）に従い、「は句」から独立していない場合も遊離数量詞とみなす。

(2)　「付加移動」は、最大投射範疇に付加するような移動である。付加部へ移動する「付加部移動」とは異なる。また、補部に移動する場合「補部移動」と呼ばれる。

(i)　付加移動　　(ii)　付加部移動　　(iii)　補部移動

(i-iii) では、それぞれ t の位置にあった要素がαの位置に移動している。

d．男がワインを店で3本買った。

(5) a．ワインを3本とビールを2本買った。

b．ワインを3本と2本のビールを買った。

c．*ワインを3本と2本のビール買った。

なお、本稿では、(1b)は(2b)の「名詞＋助詞」省略説を取る。

2. 従来の解決法である石井（2007，2008b）の考察

2.1. 「男が3人入ってきた」の説明

石井（2007）によると、遊離数量詞（英語では Floating Quantifier：以後 FQ と呼ぶ）の統語的振る舞いを、次の構造で説明可能である。

(6) a．(1c)の構造

b．男i — P' — PP — PP — IP — I' — た

| | | |

が　3人i　VP — V' — 入ってき

(6b)において、「男」と「3人」の間の経路数は4なので、「男」が照合子となり、この2要素には同一指標が振られているため、正しく文法的と判断される(3)。

2.2. 「男が3人は入ってきた」の説明

石井（2008b）の枠組みでは、(1c)の構造は次のようになる。

(7) a．(1c)の構造

b．男i — P' — PP — IP — I' — た

| | |

が　3人i　VP — V' — 入ってき

つまり、PP 付加部に「3人」が基底生成している。これは、石井（2007）に比べ、理にかなっている。というのは、石井（2007）では、FQ のS構造の位置は、空である PP 付加部内ではなく、PP 付加された位置に生じ、しかも移動関係を示していないからである。つまり、移動していないのに付加しているのが矛盾である。通常、「付加」という操

(3) (6b)文の認可には、「照合子条件」と「照合条件」が関わっている。

(i) 照合子条件

NP とその NP の照合対象の FQ の間の経路数が6以下であれば、NP は照合子となる。

(ii) 照合条件

照合子 NP と被照合子 FQ に同一指標が振られている場合のみ NP と FQ の構造が認可される。

経路数とは、結節点から結節点を結ぶ線の数のことである。例えば、(iii)においては、α から FQ までの経路数は3である。

(iii) α — P' — PP

| |

が　3人（＝FQ）

作は「移動」を伴うのに、その付加位置に基底生成しているというように判断されるからである(4)。

さて、改善された(7b)の構造においてさえ、「は」がどの位置を占めるのかが、説明できない。その前に、「は」の入る余地がない。石井（2008b）では、話題化の「は句」の統語的位置は明らかにしているものの、この種の「は句」の統語的位置を提案していないので、「3人」と「は句」の位置関係が分からず、(1d)は説明できないということになる。

3.　付加移動と補部移動

3.1.　付加移動の提案

(1d)を説明する理論の構築の前段階として、次の文を考察する。

(8)　3人入ってきた。[＝(1b)]

本稿では、この文は(1c)のような主語入りの文の主語の「が句」が省略された現象と考える。というのは、直感的には、(8)文には必ず文脈が必要で、文脈なしでは(8)文は不安定な感じがあるからである。

一方、日本語では、主語の省略現象は頻繁に起こるが、PP句がまとまって省略されると考えるほうが論理的である。というのは、生成文法の枠組みでは、「移動」という現象は、最大投射範疇（XPの形）または、その最大投射に入っている要素に言えることで、中間投射（X'）には言えないということから推論して、「省略」という現象にも同様のことが言えると考えるほうが、理にかなうからである(5)。

先に見た次の構造で確認する。

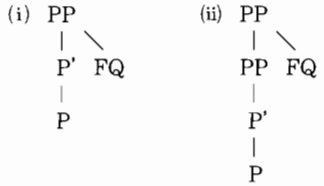
(9) a．(1c)の構造

b．男i — P' — PP — IP — I' — た

　　|　　|　　|

　　が　3人i　VP — V' — 入ってき

(4)　付加部内位置と付加位置は異なる。付加部内位置にFQが入っている状態が(i)で、付加位置にFQが存在している状態が(ii)である。



(5)「移動」はXPまたは要素が、顕在的α地点から消え、顕在的β地点へ生じる現象と言え、一方、「省略」はXPまたは要素が、顕在的α地点から消える現象と言え、「顕在的地点から消える」という共通点を持つことからも、移動と省略は類似現象と判断してよい。

つまり、(9b)において、「男が」が省略された形が、(8)であるが、その場合、P'という中間投射が省略されていることになる。要素である「男」だけを省略するわけにはいかない。なぜなら(10)文が派生するからである。

(10) *が3人入ってきた。

一方、PPを省略すると、(11)文が派生してしまう。

(11) 入ってきた。

結論から言えば、(8)文が正しく存在するには、FQという要素自体の移動を先に考える必要があり、このときに要請される移動が「付加移動」に他ならない。

つまり、まず、(6)と同様の構造が派生するのである。ただし、移動関係が記述されている。

(12) 男i — P' — PP — PP — IP — I' — た
　　 | | | |
　　 が ti 3人i VP — V' — 入ってき

(12)では、tiの位置に基底生成したFQ（3人）がPP付加されている。そして、この構造から「が句」が省略されるのである。すると、(13)のような構造ができ上がる。

(13) PP — IP — I' — た
　　 | |
　　 3人 VP — V' — 入ってき

その移動操作後のS構造では、「男」が消滅し、「3人」が単独で存在しているので、S構造で照合する必要はなくなり、(13)文［＝(8)文］が正しく文法的であると判断される(6)。

(8)文が派生するのに必要であった移動が「付加移動」である。ここで、まとめると、次の(14)が言えるということになる。

(14) FQは付加移動が可能である。

3.2. 補部移動の提案

まず、次の文を考察する。

(15) 3人は入ってきた。

(15)文は、2つの点で曖昧である。

(16) a．既知の3人が全員入ってきたという意味
　　 b．入ってきたきたのは少なくとも3人であるという意味

「3人」と「入る」の関係は、主述関係なので、「3人」は「が句」の付加部位置に基底生成する。しかし、(15)においては、実際には「は句」の補部の位置に現れている。

(6) 「男」が存在する場合は、「男」が照合子となり「3人」は照合される。

(17)　　PP（=「は句」）
　　|
　　P'
　　／　＼
　3人　　は

「３人」が初めから「は句」の主要部に基底生成すると考えることは、理論的に煩雑になると、本稿では考える。つまり、「が句」の付加部から FQ（＝３人）が、「は句」の補部に移動したと考えるのである。これが「補部移動」に他ならない。つまり、(18)の移動も認可されるのである。

(18)　FQ は補部移動が可能である。

(19)　「３人は入ってきた」の構造

```
3人i ― P' ― PP ― CP ― CP ― C' ― C
        |                     |
        は          PP ― PP ― IP
                 ／ |     |     |
              P'  t1i   t2i    I' ― た
           ／ |                |
        NP  が              VP ― V' ― 入ってき
```

(19)において、「が句」PP の付加部に基底生成した「３人」という FQ（=t_1の位置）が付加移動し、PP 付加され（=t_2の位置）、「が句」が省略される。同 FQ は「は句」の補部に補部移動して、(16a)の意味を持つ(15)文の派生が完了する。このとき、NP と FQ の間は経路数が10であるが、Ｓ構造では FQ のみが残っているので、照合は行われず、正しく文法的と判断される。

4.　FQ の基底生成位置の若干の修正

4.1.　「が句」と「と句」の組み合わせの統語的位置

次の句を考察する。

(20)　男が３人と女が５人

この表現は、次の観察から、やはり主格位置に現れるものと考えられる。従って、この表現も「が句」の変形なのである(7)。

(21) a．男が３人と女が５人入ってきた。

---

(7)　同様に(i)は、「を句」を連結しているので、目的語位置に現れる。この「を句」が主格位置に現れると非文法的である。
　(i)　男を３人と女を５人連れてきた。
　(ii) *男を３人と女を５人入ってきた。

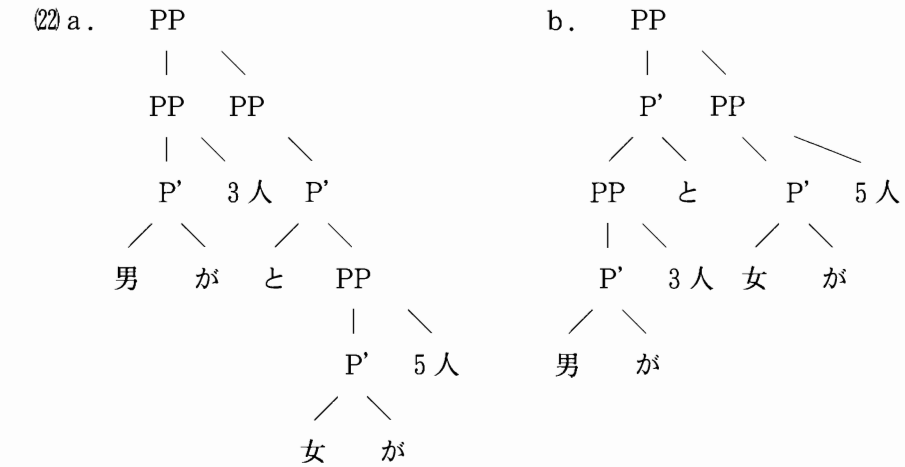
b．??男が 3 人と女が 5 人を面接した。

c．??男が 3 人と女が 5 人に出会った。

主格位置は、IP の指定部なので、⒇の全体の句は、1 つのまとまりを成して、この指定部に収まる必要がある。

4.2. 「と句」の構造の 2 つの可能性

「と句」はそもそも「AとB」という表現の「Aと」と「とB」のいずれであるか、更に、「が句」との関係を考察しよう。まず、2 種類の構造記述が想定できる。先に挙げた⒇句の 2 つの構造記述の可能性を示してみよう。



(22a,b)ともに IP 指定部に、まとまって代入できるので、構造記述としては有力である。しかし、着眼点が異なる。(22a)では「女が 5 人」を表す PP が主要部である「と」の姉妹位置に来ているので、「と＋B」という連結を強調しているのに対し、(22b)では、「男が 3 人」が「と」の姉妹位置に来ているので、「A＋と」の連結を強調していると言える。

(22a)では「と女が 5 人」という「と句」が「男が 3 人」という「が句」に PP 付加されており、一方、(22b)では「男が 3 人と」という「と句」の付加部に「女が 5 人」という「が句」が代入されている。(22a)の「と女が 5 人」という付加要素や(22b)の「女が 5 人」という付加部内要素は、修飾句として機能するため、省略可能であると判断できる。

すると、省略された場合、(22a)では「男が 3 人」が残り、(22b)では「男が 3 人と」が残ることになる。従って、安定しているのは(22a)ということになり、⒇の構造記述は、(22a)が正しいと判断できる[8]。

(22a)の構造には、⑿の構造と同じ、PP 付加が見られる。(22a)の場合、基底生成時か

⑻ (22a)では PP 付加された最大投射範疇は、この位置に基底生成されることになるが、これは止むを得ない例外的現象と考えられる。

らこの構造であるが、これは、石井（2008b）で提案した(23)のような FQ の基底生成の構造とは若干異なる。

(23) a．主語位置の FQ の基底生成位置

```
NP — P' — PP — IP
       |     |
       P     FQ
```

b．目的語位置の FQ の基底生成位置

```
        VP — V' — V
               |
NP — P' — PP
       |     |
       P     FQ
```

(12)や(22a)の構造から、主語位置と目的語位置の FQ の基底生成位置は、次のようなものであると想定する。

(24) a．主語位置の FQ の基底生成位置

```
NP — P' — PP〜PP — IP
       |     |
       P     FQ
```

※PP〜PP は、複数個の PP が生じている可能性があることを示す。

b．目的語位置の FQ の基底生成位置

```
                          VP
                           |
NP — P' — PP〜PP — V'
       |     |      |
       P     FQ     V
```

※PP〜PP は、複数個の PP が生じている可能性があることを示す。

5.　新提案の検証

5.1.　「男が３人は入ってきた」文の分析

(1d)文の分析を新提案、すなわち、付加移動と補部移動の原理を用い、分析してみる。まず、この文の構造は、(25b)のようになっていると考えられる。スペースを節約する目的で、横書き樹形図を採用する(9)。

(9)　横書き樹形図で、イメージが捉えやすいように、XP（最大投射）と X'（中間投射）と X（主要部要素）↗

(25) a．男が3人は入ってきた。

b．

```
        男i              IP ― I' ― た
         |               |    |
が ― P' ― PP ― PP        VP ― V' ― 入ってき
          |     |
          ti    PP ― P' ― は
                        |
                      3人i
```

まず、「が句」の付加部に FQ（3人）が基底生成する。また同時に補部が空である「は句」が「が句」の付加位置に基底生成する。空の補部に FQ が補部移動し、「が句」の付加部内に ti という痕跡を残す。FQ が強制的に移動する理由は、補部が主要部と姉妹関係を成すので、主要部の顕在要素が補部の顕在要素を必要とするからである。

ここで、FQ である「3人」の認可の可能性を考察する。「男」と「3人」の間の経路数は、6で照合子条件をクリアし、「男」は照合子となり、「男」と「3人」には同一指標が振られているので、照合条件も満足する。したがって、「3人」は認可され、「男が3人は」という構造が文法的であると正しく分析できる。

5.2. 「男が突然3人入ってきた」文の分析

「男が3人」の表現の間に副詞が入り込んで、この「が句」が、いかにも1つの構成素ではないような振る舞いをすることがあるが、「男が突然3人」も主語として機能しているので、一つの PP としてまとまっていると考えられる。この構造にも、付加移動と補部移動が関わっていると思われる。そこで、次の文を分析してみよう。

(26) a．男が突然3人入ってきた。

b．

```
        男i              IP ― I' ― た
         |               |    |
が ― P' ― PP ― PP        VP ― V' ― 入ってき
          |     |
          ti    AdvP ― Adv' ― 3人i
                        |
                       突然
```

(26b)によると、副詞句「突然」が付加移動して PP 付加されている。「3人」は、「が

↘は一直線になるように表すことにする。これにより、XP の付加移動や FQ の補部移動の結果を、それぞれ XP や X' と縦の関係で表すことができる。すなわち、「は句」の PP は PP の真下に、「3人」は P' の真下に来ている。

句」の付加部から、「突然」という AdvP の主要部と姉妹関係の位置にある補部へ補部移動してS構造が決定する。ここで、「男」と「3人」の間は経路数6で、照合子条件を満たし、「男」が照合子となり、更に、同一指標が「男」と「3人」に振られているので、照合条件も満たし、(26a)文が認可される。これは事実を正しく説明している[10]。

5.3. 「男が店で3軒飲んだ」文の分析

次の文を考察してみる。

(27) a．男が店から3人現れた。

b．男が店で3人飲んでいた。

(27a,b)文ともに、「男が3人」の間に「店から」や「店で」が挿入された形になっているが、これは(26b)の構造の AdvP の代わりに、「から句」や「で句」という PP が付加されている状況である。従って、これらの文は、(26b)と同じ分析で説明できる。つまり、これらの文は、正しく文法的であることが証明される。

では、(27b)の FQ「3人」が「3軒」になった場合を分析してみる。

(28) a．＊男が店で3軒飲んだ。

b．

```
        男i            IP — I' — た
         |             |     |
   が — P' — PP — PP     VP — V' — 飲ん
                |       |
        店 — P' — PPj    tj
              |     |
              で   3軒 k
```

(28b)において、VP 付加部に基底生成した「で句」が「が句」に付加移動し、その後、「で句」の付加部に FQ（3軒）が代入される形になっている。

そもそも FQ は、PP 内で基底生成する場合は、「が句」と「を句」内でしか基底生成しないわけだから、「で句」付加部で基底生成するはずがない[11]。

---

(10) 「突然」と「3人」の関わりが深いと思われる。つまり、(i)と(ii)はニュアンスが異なる点に注意したい。

(i) 男が突然入ってきた。

(ii) 男が突然3人入ってきた。

(ii)で強調されているのは、「3人も入ってくるのが突然である」ニュアンスが感じられ、「入ってきた」ことよりも「3人」を強調している。その意味で「3人」が「突然」の AdvP 内の、しかも補部に生じているのである。省略して同じニュアンスを伝えることはできないので、省略できない補部の位置にないといけないということになる。

(11) 「男が3人」や「ワインを3本」は意味を成すが、「店で3軒」は意味を成さないこと自体が、「で句」に FQ が基底生成するはずがないという考え方を支持する。「で句」に限らず、「が句」と「を句」以外は全て基底生成しないのである。だから、石井（2008b）では、「男は3人」における「は句」の分析を試みているのである。

以上の理由で「店」は、「３軒」に対して、はじめから照合子になれないと考えることができ、照合子を「男」というNPに託す。「男」と「３軒」の間は経路数５なので、照合子条件をクリアし、「男」は「３軒」の照合子となる。しかし、両者に同一指標が振られていないので、照合条件を満足せず、その結果、正しく(28a)が非文法的であると予想する。

6. まとめ

「付加移動」と「補部移動」を駆使すれば、生成文法の照合理論の枠組みで、「ＡがＢはＣする文」をはじめ「ＡがXB、Ｃする文」（Ａ：名詞、Ｂ：遊離数量詞、Ｃ：動詞、Ｘ：副詞［または副詞句］）などの分析が可能となり、文法性を説明できることが分かった[12]。

しかし、文中に「が句」や「を句」が生じない場合、FQがどこに基底生成するのかについては、今後の研究に委ねたい。例えば、(29a,b)は「が句」や「を句」の省略と考えられるので、FQはそれぞれＤ構造では「が句」や「を句」に生じていたものと考えられるが、(30a-c)のような文における下線部の数量詞が遊離数量詞と考えた場合、この構造の派生をどう解釈し、どのように説明できるかということに関しては、今後の研究課題としたい。

(29) a．３人入ってきた。［＝(1b)］
　　b．３杯飲んだ。

(30) a．<u>３人</u>で勉強した。
　　b．ワインは<u>５本</u>から割引になった。
　　c．その会社は<u>７カ国</u>に支店がある。

参　考　文　献

石井隆之（2006）「不変化詞の統語的位置と情報構造」『生駒経済論叢』第３巻第３号：1-20.

石井隆之（2007）「日本語遊離数量詞の統語的振舞と照合理論」『言語文化学会論集』第29号：37-58.

石井隆之（2008a）「遊離数量詞の統語的振る舞いに関する一考察」『近畿大学英語研究会紀要』第１号：137-150.

石井隆之（2008b）「日本語助詞「は」と遊離数量詞の関係」『近畿大学英語研究会紀要』

(12) 「ＡがＢはＣする文」については、「男が３人は入ってきた」を、「ＡがXB、Ｃする文」については、「男が突然３人入ってきた」と「男が店で３軒飲んだ」の２つの文を本稿で扱った。Ｘの部分については、「突然」が副詞句（AdvP）、「店で」が後置詞句（PP）である。

第2号：61-77.

Fillmore, Charles J. (1968). "The Case for Case." In Bach and Harms (Ed.): *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart, and Winston：1-88.

木村宣美（2003）「遊離数量詞の構成素性について」『人文社会論叢』第9号（弘前大学人文学部）：129-144.

小泉保（1994）「Xバー理論と格理論の欠陥―中島氏の反論に答える」『言語』第23巻第11号：92-97.

Lasnik, H. and M. Saito (1992). *Move Alpha: Conditions on Its Application and Output*. MIT Press.

町田健（2000）『生成文法がわかる本』東京：研究社出版.

松浪有、池上嘉彦、今井邦彦（編）（1983）『大修館英語学事典』東京：大修館書店.

三原健一（1994）『日本語の統語構造　生成文法理論とその応用』東京：松柏社.

三原健一（1998）『生成文法と比較統語論』東京：くろしお出版.

三原健一（1999）「統語論　生成文法」西光義弘（編）『日英語対照による英語学概論　増補版』：97-136.

三上章（1960）『象は鼻が長い―日本文法入門』東京：くろしお出版.

毛利可信（1954）『語順』東京：研究社出版.

中島平三・池内正幸（2005）『明日に架ける生成文法』東京：開拓社.

Reinhart, T (1976). "The syntactic domain of anaphora," Unpublished Ph. D. dissertation, MIT.

瀬田幸人（1994）「これが〈Xバー理論〉だ」『言語』第23巻第3号：34-43.

田窪行則他編（1998）『言語の科学6　生成文法』東京：岩波書店.

田窪行則、稲田俊明、中島平三、外池滋生、福井直樹（1998）『生成文法』東京：岩波書店.

竹沢幸一、John Whitman（1998）『格と語順と統語構造』東京：研究社出版.